岩波文庫

32-004-7

杜詩

第七冊

鈴木虎雄
黒川洋一 訳注

岩波書店

杜詩（とし） 第七冊 〔全8冊〕

1966年6月16日 第1刷発行
2005年2月22日 第9刷発行

訳注者 鈴木虎雄（すずきとらお） 黒川洋一（くろかわよういち）

発行者 山口昭男

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・精興社 製本・中永製本

ISBN 4-00-320047-0 Printed in Japan

岩波文庫

32-004-7

杜詩

第七冊

鈴木虎雄
黒川洋一 訳注

岩波書店

目次

偶題……一
李潮が八分小篆の歌……一七
峽口二首……二三
南極……二五
瞿唐の両崖……二七
西閣の口号、元二十一に呈す……二八
閣夜……二九
瀼西の寒望……三一
縛鷄行……三三
小至……三四
柏中丞に陪して将士の宴するを観る二首（うち一首）……三六
荆南兵馬使太常卿趙公が大食刀の歌……三八
王兵馬使が二角鷹……四四
王監兵馬使が説くを見る、近山に白黒の二鷹有り、羅者久しく取らんとするに、竟に未だ得る能わずと、王以為えらく毛骨他鷹に異な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

る有り、恐らくは臘後春生ぜば、褰飛して暖を避け、勁翮秋を思うの甚だしき、眇として見る可からざらんと、余に請い詩を賦せしむ
二首（うち一首）……四九
酔うて馬より墜つるを為す、諸公酒を攜えて相看る……五二
李功曹が荆州に之きて鄭侍御が判官に充てらるるを送る、
重ねて贈る……五七
立春……五八
愁い……六〇
即事……六二
宅に入る　三首（うち二首）……六四
暮春灞西の新たに賃せる草屋に題す　五首（うち三首）……六七
熟食日、宗文宗武に示す……七〇
観が即ち到らんとするを喜び、復た短篇を題す　二首……七二
恵二が故居に帰るを送る……七四
河北諸道の節度が入朝すと承聞し、歓喜して口号せる絶句
十二首（うち三首）……七六
過客相尋ぬ……八〇
伐木を課す……八一

槐葉の冷淘……八七
後園の山腳に上る……九〇
灩　瀕……九三
七月一日、終明府が水楼に題す　二首（うち一首）……九五
行官張望、稻畦の水を補いて帰る……九七
秋、行官張望、東渚の耗稻を督促し、畢るに向んとす。
清晨、女奴阿稽・豎子阿段を遣わし往きて問わしむ……一〇一
又た後園の山腳に上る……一〇五
豎子を駆りて蒼耳を摘ましむ……一〇九
諸葛廟……一一三
螢火を見る……一一四
李八秘書が杜相公の幕に赴くを送る……一一五
吾　宗……一一七
狄明府博済に寄す……一一八
元使君が春陵行に同ず……一二三
秋日夔府の詠懐、鄭監審・李賓客之芳に寄せ奉る　一百韻……一三七
秋　野　五首……一六一
小豎に課して舎北の果林を鋤斫せしむ、枝蔓荒穢浄し訖りて

牀を移す　三首（うち一首）……一六七
返照……一六八
夕べに向こう……一七〇
天池……一七一
復た愁う　十二首（うち二首）……一七三
瀼西の荆扉より且く東屯の茅屋に移居す　四首（うち二首）……一七五
社日両篇（うち一首）……一七七
八月十五夜の月　二首……一七九
十六夜、月を翫ぶ……一八二
十七夜、月に対す……一八三
暁望……一八四
日暮……一八五
夜……一八六
孟倉曹歩趾、新酒・醤二物を領して満器老夫に遺らる……一八七
九日　五首（うち二首、「登高」を含む）……一八九
東屯の月夜……一九一
暫く白帝に往き、復た東屯に還る……一九三
稲を刈り了りて懐を詠ず……一九四

季秋、蘇五弟纓、江楼にて夜崔十三評事・韋少府姪を宴す
三首(うち一首)……一九五
即事……一九七
独座二首(うち一首)……一九八
大暦二年九月三十日……一九九
雷……二〇〇
雨四首(うち二首)……二〇二
大覚高僧の蘭若……二〇四
真諦寺の禅師に謁す……二〇七
虎牙行……二〇八
公孫大娘が弟子の剣器を舞うを観る行 幷びに序……二一一
懐を写す二首(うち一首)……二一九
柳司馬至る……二二三
歎有り……二二四
舍弟観藍田に赴き、妻子を取り江陵に到ると、喜びて寄す
三首(うち一首)……二二五
夜帰る……二二七
後苦寒行二首……二二九

杜詩

第七册

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

偶題（偶題）

偶然にかきつけた詩。文章の沿革より自己の詩学に及び、この詩を賦すわけを叙している。

文章千古事　得失寸心知
作者皆殊列　名聲豈浪垂
騷人嗟不見　漢道盛於斯
前輩飛騰入　餘波綺麗爲
後賢兼舊制　歴代各清規『
法自儒家有　心從弱歳疲
永懐江左逸　多病鄴中奇
騏驥皆良馬　麒麟帶好兒
車輪徒已斲　堂構惜仍虧

文章千古の事　得失寸心知る
作者皆殊列なり　名声豈に浪りに垂れんや
騷人嗟見えず　漢道斯に盛んなり
前輩飛騰して入る　余波綺麗と為る
後賢旧制を兼ぬ　歴代各〻清規あり『
法は儒家より有す　心は弱歳より疲る
永く懐う江左の逸　多く病ましめらる鄴中の奇なるに
騏驥皆良馬　麒麟好児を帯ぶ
車輪徒らに已に斲す　堂構仍お虧けたるを惜しむ

漫作潛夫論　虛傳幼婦碑』
緣情慰漂蕩　抱疾屢遷移
經濟慙長策　飛棲假一枝』
塵沙傍蜂蠆　江峽繞蛟螭
蕭瑟唐虞遠　聯翩楚漢危
聖朝兼盜賊　異俗更喧卑
鬱鬱星辰劍　蒼蒼雲雨池
兩都開幕府　萬寓插軍麾
南海殘銅柱　東風避月支』
音書恨烏鵲　號怒怪熊羆
稼穡分詩興　柴荆學土宜
故山迷白閣　秋水憶黃陂
不敢要佳句　愁來賦別離』

漫りに作る潛夫論　虛しく伝う幼婦の碑』
緣情漂蕩を慰む　抱疾屢〻遷移す
經濟長策を慙ず　飛棲一枝を仮る』
塵沙に蜂蠆に傍う　江峽、蛟螭繞る
蕭瑟として唐虞遠く　聯翩として楚漢危し
聖朝盜賊を兼ね　異俗更に喧卑なり
鬱鬱たり星辰劍　蒼蒼たり雲雨の池
両都幕府を開く　万寓軍麾を插む
南海銅柱残る　東風月支を避く』
音書烏鵲を恨む　号怒熊羆を怪しむ
稼穡詩興を分かつ　柴荆土宜を学ぶ
故山白閣迷う　秋水黃陂を憶う
敢て佳句を要せず　愁い来たりて別離を賦す』

○千古事　永遠に不朽の事業であることをいう。○得失　佳否をいう。○寸心知　寸心とは方寸の心、自家の心中をいう。○作者　古今の作家。○殊列　特別に列位に在ること。○浪垂　真の価値なくしてみだりに後世に伝わる。○騷人　騷とは周末に楚の屈原が作った韻文の一体である、その体によって作るものを騷人という、

屈原の門人に宋玉・景差・唐勒らがあり、みないわゆる騷人である。○嗟不見　不見とは見ることのできないことをいう。○漢道　漢代の文章の道をいう、漢に至って五言七言の詩が起こった。○盛於斯　斯はその時をさす。○前輩　後漢の建安、魏の黄初などの時代の文学界の先輩。○飛騰入　鳥の飛び馬のおどりあがるごとく奮って漢道に入ったこと。○余波　漢魏の文章の流れの余波。○綺麗為　為二綺麗一というのに同じ、これは六朝文学のすがたをいう。○後賢　六朝以後の賢人。○兼旧制　後賢がその自己より以前の時代の文学の体制を兼ね有すること、広く材料を取ることをいう。○歴代　各時代。○各清規　それぞれ清らかな規律を有する、意匠の新らしいところのあることをいう。以上起十句は詩学の源流を叙する。○法自儒家有　法とは文章の法、儒家とは儒道の家、自己の家をさす、作者の祖父杜審言は詩の名家であり、杜甫は審言から詩法を伝えられたので儒家より有すという。○弱歳　二十歳。○江左逸　江左は江東、江南、すなわち六朝が都した処をいう、鮑照・謝霊雲以下の六朝諸家をさす、逸とはすぐれていることをいう。○多病鄴中奇　病とは鄴中の奇に対して自己を病んでいるとし、あきたらずとすることである、鄴中の奇なることをあきたらずとするのではない。不完全句である。鄴は魏の都で今の河南省彰徳府臨漳県である。魏の時代に孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・応瑒・劉楨の鄴中七子があった、また曹植も傑出していた、鄴中の奇とはそれらの詩人をさしていう。○騄驥皆良馬、麒麟帯好児　騄驥は千里の名馬、上述の過去の諸家をたとえていう、帯好児とは父子ともに傑出したものもあることをいう、魏の曹操と曹丕・曹植、阮瑀と阮籍のごときものをさす。○車輪徒已斲　「荘子」(天道)に車輪を作る大工で名は扁という者が斉の桓公に答えた話があるが、それにはいう、扁は輪を造る手心は自己の子にもさとらせることができず、ために行年七十にして斲輪(わをけずる)の仕事の中に老いてしまった、と。作者はその作詩において、この扁の如くにその妙悟は子供に伝えることができないことをいう。○堂構惜仍虧　「尚書」(大誥)に、「若考室ヲ作リ、既ニ法ヲ底ス、厥ノ子乃チ肯テ堂セズ、矧ヤ肯テ構センヤ」とみえ

る。父が室を作ろうとしてすでに基址を営建する法を致したのに、その子たるもので堂をさえも造らぬものは、ましてそのうえに屋架を構立するはずがないというのである。堂構は、ここでは子が父の志をついで事をなす意に用いる。仍虧とは今なおかけている、すなわち不肖の子は父の志を継ぐことができないことをいう。○潛夫論　後漢の王符の故事、符、字は節信は隱居して書を著わし時の政治をそしり、名づけて「潛夫論」といった、自分はこれに類することをいう。○幼婦碑　魏の邯鄲淳の「曹娥碑」に蔡邕がその後に題していうのに、「黄絹幼婦、外孫虀臼」と。楊脩はこれを読んで解していう、曹操行くこと三十里にして乃ち悟りて曰く、黄絹とは色糸にて絶の字なり、幼婦とは少女にて妙の字なり、外孫とは女子の子にて好の字なり、虀臼とは辛を受ける器にて辭(辞)の字なり、絶妙好辞をいうと。幼婦碑とは曹娥碑のごとき妙好の文辞をいう。「法自」以下十句は自家の詩学の伝わらぬことをはじる。○緣情　陸機の「文ノ賦」にいう、「詩ハ情ニ緣リテ綺靡ナリ」と。この緣情とは情によって詩をつくることをいう。○漂蕩　漂泊の生活。○遷移　諸処をうつりあるくことをいう。○経済　世を経綸しすくうこと。○慙長策　すぐれているはかりごとのないことをはじること。○飛棲自己を鳥にたとえる。○仮一枝　「荘子」(逍遙遊)の「鷦鷯ハ深林ニ巣クウモ一枝ニ過ギズ」の意に用いる、すでにみえる。「緣情」の句以下は夔州に客寓する事情を叙する。○蜂蠆　蠆はさそりの類。○蛟螭　みずち、蜂蠆蛟螭はよくない人物を比していう。○唐虞　堯舜の時代。○聯翩　つらなるさま、ひきつづくことをいう。○楚漢危　楚の項羽と漢の高祖とが天下を争って形勢が危い、時世をたとえていう。○兼盜賊　兼とは盜賊をも有することをいう。○異俗　夔州の他とちがった風俗。○喧卑　やかましく、かついやしい。「塵沙」六句は夔州のさまをいう。○鬱鬱　光ののびぬさま。○星辰剣　その紫気が斗牛の星辰を衝くような剣、暗に豊城の雷煥の剣の故事(第三冊一一八ページ)を用いる、自己の埋もれた才を比する。○蒼蒼　くらいさま。○雲雨池雲雨をおこすと竜が躍りだす池、暗に周瑜が劉備を評して蛟竜、雲雨を得ば池中の物に非ずといった意を用い

る、自己を躍り出ぬ竜に比する、漢・池の二句は策があっても施すすべのないことをいう。○両都　長安、洛陽。○幕府　元帥の府をいう。○万寓　寓は宇に同じ、万宇は天下をいう。○插軍麾　軍麾は指揮する采配の類。さしまねくはたをいう。插は軍将がみな軍麾をさしはさんでいる、天下がみな軍隊を用いつつあることをいう。○南海銅柱残　南海・銅柱については「諸将」詩の第四首の句解(第六冊七一ページ)をみよ、南海は広東地方の海をいい、銅柱は元来は交趾のことであるが、今は一つとして用いている、南方に銅柱が残るとは唐の権力が幸いにここに存することをいう。○東風避月支　東風避とは東風の勢いが弱くして競わず、月支を避けることをいう、長安は吐蕃(チベット)に対すれば東にあたる、月支は漢代の西域の夷国、吐蕃に比したもの。「鬱鬱」六句は国事をいう。○音書　てがみ、たより、故郷のそれをいう。○恨烏鵲　「西京雑記」に「乾鵲噪ギテ行人至ル」という民間辻占(つじうら)がある、烏鵲(かささぎ)がさわいでも自分の待つ手紙のやって来ないのでそれを恨む。○熊羆　くまとひぐま、暗に悪人を比していう。○稼穡　うえつけ、とりいれ。○分詩興　農事に対しても詩興をいだくことをいうのであろう。○柴荆　柴荆をしばってこしらえた門、自分の家の門をいう。○学士宜　土宜とは土地に適当してよくできる産物をいう、耕作物についていう。○故山　故郷(長安)の山。○迷白閣　白閣は終南山中の峰の名、迷とは望んでも不明なことをいう。○黄陂　皇子陂のこと、黄の字は皇に作るべきである、同音なので誤ったもの。皇子陂はつつみの名、「重ネテ何氏ニ過ギル」詩の第二首の句解(第一冊一五五ページ)をみよ。○要佳句　要はもとめる。○賦別離　故郷と別離しておる情を賦する、「音書」以下末尾八句は故郷を思うことをのべる。

文章は永遠不朽の事業であるが、その佳否得失に至ってはただ作者自家の方寸の心が知るばかりのものである。むかしから作者とよばれるほどの人人はみな特殊な列位にあるもので、その人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton